The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	モンゴ人のジレンマ : ザイール国語化問題の一断章
Author(s)	梶, 茂樹
Citation	スワヒリ＆アフリカ研究. 1991, 2, p. 180-185
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/71071
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

モンゴ人のジレンマ

――ザイール国語化問題の一断章――

梶　茂樹

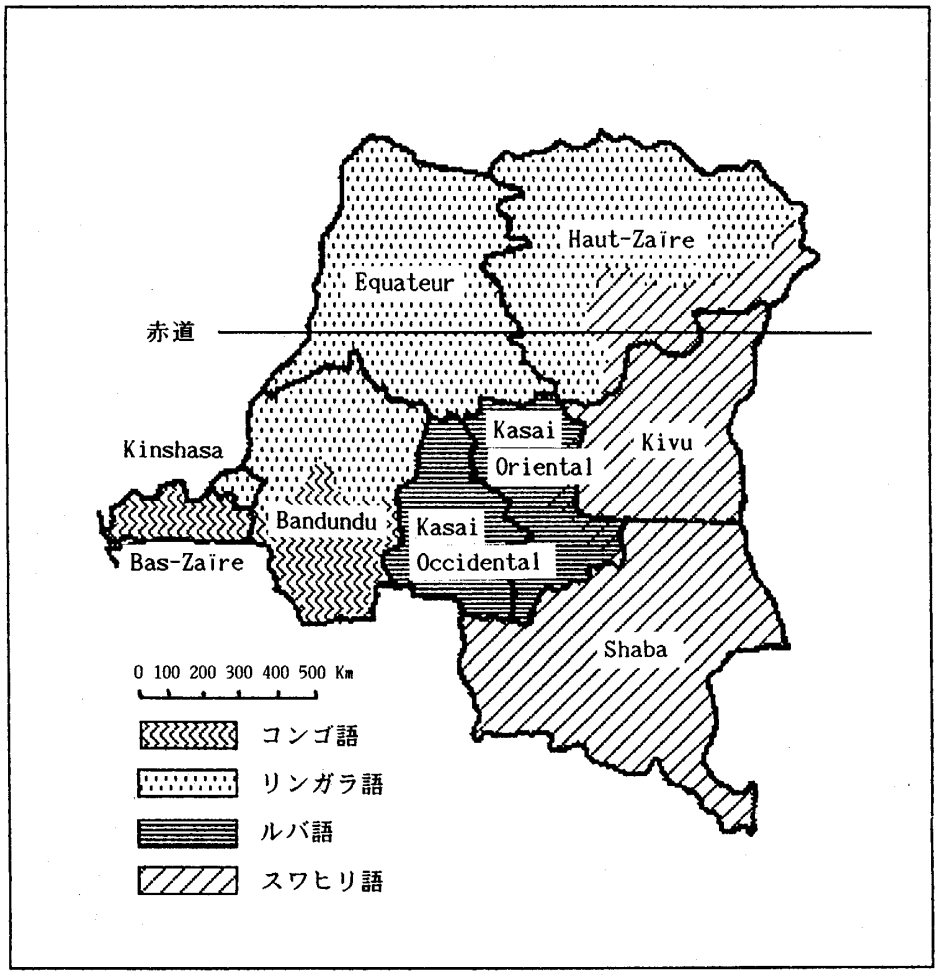
ザイールには、一説によれば２５０もの部族語が話されているが、同時に、コンゴ語、リンガラ語、ルバ語、スワヒリ語という４つの大きな共通語があり、これがほぼ国を４分して、それぞれ、国の西部、北西部、中南部、東部で地域共通語として用いられている（地図参照）。この４大言語はザイールでは、しばしばフランス語で――ザイールはフランス語圏――、langue nationale と呼ばれる。これは、英語でいうと national language であるから、「国語」と訳してよさそうなものだが、ちょっと注意が必要だ。というのは、national(e) には、視点が、国の中に対してと、外に対しての２つの立場があり、それぞれに応じて、対比されているものとの関係で意味あいが大きく異なるからだ。すなわち、視点を国内にすえると、部族、民族、あるいは地方といったものではなく、“国全体”に係わるものを指すが、他方、視点を対外的なものに移すと、外国のものではなくて、“国内的”なものを指すからだ。言語の例でいうと、前者では、レガ語やソンギェ語、あるいはザンデ語などといった、国内の各地方で話されている部族語ではないという意味だし、後者では、外来の言語、とりわけフランス語ではなく、われわれの、アフリカに発した言語という意味である。

本来ならば、この外からと内からの２つの視点が、言語に関してはひとつに収斂すればいいのであるが、残念ながら、現在のザイールでは「国語」は４つあり、それぞれが唯一の国語を目指して争っているという状況なのだ。もちろん、既に植民地時代から多くの人が、それぞれの立場で、コンゴ語、ルバ語、リンガラ語、そしてスワヒリ語を、唯一の国語にしようと画策してきた。しかしアフリカでは、言語の問題はすぐれて政治的問題で、そこに利害――しばしば、部族主義に根ざした――が絡むので、事はなかなか簡単には進まない。特に、４つの言語が拮抗しているときはそうである[1]。

ところが現在は、状況が数十年前とは大きく異なり、上述の４つの言語の内、リンガラ語とスワヒリ語が、コンゴ語、ルバ語を一歩も二歩もリードしてしまった。確かにコンゴ

語とルバ語は共通語であるとはいえ、もとを質せば、それぞれ、コンゴ族、ルバ族の言語であり、部族主義を嫌うザイールの政治的風土になじまない。それに対して、リンガラ語とスワヒリ語には、直接の支持母体がないという利点がある。それに、また、次のような事情もある。

例えば、コンゴ語といっても、広い地域に話されているので、当然、方言差がある。それは、しばしば、１００キロか２００キロしか離れていなくても、はっきりとわかる程である。そこで、例えば、知らない土地に行った人間が、相手は同じコンゴ族だと思って、いつものように話しても、相手は、“何を、この野郎、生意気な口をききやがって！”ということで、ポカンと殴られる、というようなことが起こる。彼にしたら、なぜ殴られるのかわからない。同じコンゴ族で、同じコンゴ語を話しているのだ。問題があるとしたら、



地図　ザイールの州区分[2]と４大共通語の分布

それは、単にちょっと方言差があるということにすぎない。そこで、どうせ殴られるのなら、いっそのことリンガラ語を話そう、というようなことになる。これなら、相手に文句を言われる筋合いは何もない。リンガラ語は、自分にとって本来のものではないけれど、相手にとってもそうなので、対等な立場に立てるのだ。もちろん、コンゴ族にとっては、首都のキンシャサは本来彼らの領域ながら、共通語はリンガラ語なので、リンガラ語に馴染みやすいという事情もある。もちろんこれだけの理由ではないが、近年、コンゴ族の間にリンガラ語が急速に浸透した。そして、それは現在、アンゴラ北部にも広まっているという。アンゴラ北部にも多くのコンゴ族が住んでいるのだ。

もちろん、リンガラ語の本場は赤道州だ。私は１９８９年に、ンバンダカ、バサンクスを訪れたが、リンガラ語圏に来てみて、改めてリンガラ語の影響力の強さに驚いた。国語化のルバ語論者は、ルバ語はシャバ州のみでなく、東西の両カサイ州にも広まっているというが、これは、言語の影響力というよりは、かつての民族移動の結果である。それに対して、リンガラ語の場合は、言語自体がその影響力によって拡散している。

例えば、バサンクスでは、これは本来モンゴ族の土地ながら、道行くほとんどすべての人がリンガラ語を話している。ひとつには、バサンクスはモンゴ族の領域にあるとはいえ、ンゴンベ族との境界に位置するので、そこに住むンゴンベ族も多いという事情もある。さらに、バサンクスは田舎町とはいえ町なので、町自体のもつ特殊な事情というものもある。町はいわゆるフランス語でいう extra-coutumier “伝統外的” 性格の強いところで、部族語ではなく共通語が幅をきかせやすいのである。

もちろん、その他、行政、軍隊、教会、学校、歌謡歌などの影響も見逃せない。しかし、リンガラ語がこれほどまでに赤道州に広まったのは、その言語的性質に負うところが大きい。つまり、リンガラ語というのは、モンゴ語、ンゴンベ語、ボバンギ語など、赤道州のバンツー諸語をベースにして成立したという事情があるため、土地の人たちにとっては、本来、習うようなものではなくて、自然に覚える性質のものだ。しかも、共通語化のプロセスの中で言語構造が極端に簡略化されたので、なおさらである。この簡略化は、とりわけ語彙と動詞の活用に著しい。

モンゴ族というのは、赤道州ではもちろんのこと、ザイール全体でも部族としては非常に大きく、コンゴ族、ルバ族と肩を並べる存在だ。本来ならば、国語（≒地域共通語）としては、モンゴ語――リンガラ語ではなくて！――が、コンゴ語、ルバ語、そしてスワヒリ語と同列に置かれるべきであったのかもしれない。しかし、如何せん、モンゴ語、そし

てモンゴ族というのは統一性に乏しく、全体をひとつにまとめられなかったのが災いした。したがってモンゴ族は、国語化問題では、モンゴ語の格上げは望めないとしても、リンガラ語だけは支持する立場だ。これだけは譲れない。

スワヒリ語も、前世紀から今世紀にかけて、大陸の東海岸からアラブ人（およびアラブ化された黒人たち）によってザイールにもたらされて以来、現在に至るも、国の東部を中心に拡張を続けている。おもしろいのは、この言語も、その拡張の大きな要因を、リンガラ語同様、自らの構造を地域の部族語に委ねることにおいていることだ。スワヒリ語を支持するのは、国の東部に住むレガ族やナンデ族の人たちだ。

したがって、現在ザイールにおいては、スワヒリ語とリンガラ語が、その覇権をめぐって争っているといっても過言ではない。コンゴ、ルバというかつて栄光のあった部族の言語は、もはやそのダイナミズムにおいて、新興のスワヒリ、リンガラにかなわない。

そして、これは私見だが、この２つの中で、将来的にはリンガラ語の方に軍配が上がる可能性が大きいのではないかと思う。もし、スワヒリ語になれば、中部アフリカは、インド洋岸から大西洋岸までスワヒリ語で統一されるので、確かに、アフリカ統一機構的発想では望ましいのかもしれない。実際、個々の国という枠組みを捨てて、バンツー連邦ということを提唱しているコンゴ（ザイールのコンゴ族ではなく、ブラザビル・コンゴ）のオベンガなどは、ニエレレを大統領に、そしてスワヒリ語をその連邦の国語にしようと提案している[3)]。

しかし、これは、それとは逆の、みみっちい発想といえば発想だが、ザイール国内には、国語問題は国内でカタをつけたいという意見も強い。つまり、スワヒリ語が国語になれば、国語問題でいちいちタンザニアやケニアと話し合いを持たなければならなくなり、内政問題に他国の干渉を受けかねないというわけだ。これは特にリンガラ語派の意見だが、確かに、スワヒリ語は、本場はタンザニアやケニアの東アフリカだから、あながち無駄な心配とは言えないかもしれない。それに対して、リンガラ語ならば、コンゴやアンゴラでも話されているとはいえ、ザイールが本家本元だから、こういった心配は起こりようがない。

実際、国語化問題では、残念ながらザイールでは、お互いに相手に対する不信感が強く、何かにつけて相手をけなすようなところがある。一般的反応としては、スワヒリ語の話し手は、リンガラ語の話し手を粗野で、教養がないと思っており（これは、スワヒリ語域でリンガラ語を話すのは主として兵隊であるためか）、逆にリンガラ語の話し手は、スワヒリ語の話し手を抜け目のない目敏い連中で、注意が必要だと考えている（これは、スワヒ

リ語がアラブの商人によってザイールにもたらされたためか）。

それぞれの言語にはそれぞれの利点がある。しかし、リンガラ語がスワヒリ語よりも有利な立場にあるのは、やはり、それが首都の言語になったことである。これは大きい。かつて、東部のシャバ州出身のチョンベが首相になったとき、キンシャサでスワヒリ語で政治集会をやろうとしたが、悲惨な結果に終わったという。そして彼も、しかたなく下手なリンガラ語で話すようになった…と。

しかし、リンガラ語がザイールの唯一の国語になるためには、その文法と語彙の整備は欠かせない。特に首都のリンガラ語の整備は急務である。首都というのは、ザイールに限らずアフリカではどこでもそうだが、極めて雑多な人たちが住んでいる。国が独立してせいぜい２０～３０年しかたっていないので、住人の多くは地方出身者である。そして、国の経済が破綻しているせいもあって、ほとんどの人が生活するのがやっとという有様で、言葉のことなど、いちいちかまってはおられない。そして、必要に迫られて、１～２ケ月でみんなリンガラ語を話し出す。そして、その結果は…。例えば、“私は～である”というのは、人によっては、また場合によって、nazalí、nadʒalí、nayalí、nǎ...など、好き勝手な言い方をしている。また、部族語特有の発音を持ち込む者は極めて多い。例えば、dʒ の音だが、これでは、モンゴ系丸出しである。 また gb の二重子音は、いかにもンゴンベ語風で、田舎臭い感じがする。これらはやはり、統一していく必要があるであろう。しかし、私はかつて、モンゴ人のインフォーマントをつかまえてリンガラ語の調査をしているとき、細かい表現はリンガラ語ではできないのでモンゴ語に頼らざるとえないが、それでも、何がリンガラ語であるかについて、かなりの程度、コンセンサスができているような印象を持った。

しかし、リンガラ語の問題はやはり、その構造である。構造が貧弱過ぎて、一国の国語として堪えられるかどうか、誰も自信がないのだ。モンゴ人なども、国語はリンガラ語と言いつつも、この点については、リンガラ語に対して容赦がない。“あんな言葉を話していると、脳の正常な発達が阻害される”と言うのだ。

あるとき、モンゴ人の言語学者とザイールの国語問題について話し合ったことがあった。彼は、リンガラ語が如何にモンゴ族の間に深く浸透しているか、あるいは、しつつあるかを滔々と説き、そして、あと１００年もすればモンゴ語はなくなってしまうのではないか、とさえ言う。しかし、そうは言いつつも、リンガラ語の内容に話が及ぶと、まるで吐き捨てるような言い方をするのである。私は彼の話を聞いていて、ザイールの国語化問題が最

後の段階に入って、みんながリンガラ語に決めようとしたとき、最後に反対するのは、実はモンゴ人ではないかと、ふと思った。“あの言語だけはダメだ。あんな言葉を話していたら、頭がおかしくなる”と、言うのではないか。自らはモンゴ語を忘れ、リンガラ語を話しつつ…。

注

1）この間の事情については、かつて「植民地化と言語政策、そして文字――ザイールの場合――」と題してまとめたことがある。『民博通信』Ｎｏ１７、４２－４８ページ、１９８２年、参照。

2）ザイールの州区分は、つい最近まで、Bas-Zaïre（低ザイール）州、Bandundu（バンドゥンドゥ）州、Equateur（赤道）州、Kasai Occidental（西カサイ）州、Kasai Oriental（東カサイ）州、Haut-Zaïre（高ザイール）州、Kivu（キヴ）州、Shaba（シャバ）州の８つに、Kinshasa（キンシャサ）特別区を加えて、全部で９つであったが、１９８８年に、このうちキヴ州が Nord-Kivu（北キヴ）州、Sud-Kivu（南キヴ）州、Maniema（マニエマ）州の３つに分かれた。これは、かつては Sous-Région（サブ州）と呼ばれていたものが州に格上げされたもので、キヴ州が他の州の先駆けをなすという。しかし、これは現在のところ、まだキヴ州のみにとどまっているので、ここでは州名は以前のままにしておいた。

3）Théophile Obenga, Les Bantu, Langues-Peuples-Civilisations, Présence Africaine, 1985.